

オープン・テキスト
開かれた書簡詩を読み解く——
Ishmael Reed の“Flight to Canada”

伊 鹿 倉 誠



— Billy G. Smith and Richard Wojtowicz, *Blacks Who Stole Themselves*

Words walking without masters; walking altogether like harmony in a song.

— Zora Neale Hurston, *Their Eyes Were Watching God*

Ishmael Reed の *Flight to Canada* (1976年初版刊, 以下 *FTC*) の巻頭を飾る “Flight to Canada” (3-5, 以下 “*FTC*”) は、公開書簡形式^{オープン・レター}の散文詩であり、本篇導入の機能を担う〈前テキスト〉として置かれている。*Beulahland Review* に掲載予定の当該詩篇は、投稿から3年を経て200ドルの賞金を原作者 Raven Quickskill にもたらす一方 (87)、ヴァージニア州の農園から一緒に逃亡しカナダへの逃亡途上にある Stray Leechfield や40sを含む3名の黒人奴隷の潜伏場所を密告してしまう。Arthur Swille の信頼厚い帳簿係であったクイックスキルは、その名の通り早呑込みで「スウィルが所有する奴隷の中でも最初に読み書きを習得し、そして真っ先に逃げた奴隷」(14) である。1860年代の米国南部を主な舞台とする *FTC* において攻撃の矢面に立たされるのは、キャメロット伝説の復活を画策するアーサー王信奉者スウィルや、少数民族を懐柔しつつ「文化奴隷制」(“a cultural slavery” 67) の樹立に暗中飛躍する Yankee Jack ら敵役のみならず、経済原理や暴力で自由獲得を目指すリーチフィールドやフォーティ

ズら逃亡奴隷にも批判の矛先が向けられている。

さて、奴隷詩人クイックスキルは、“FTC”に関して謎めいた回想をする。

Little did I know when I wrote the poem “Flight to Canada” that there were so many secrets locked inside its world. It was more of a reading than a writing. Everything it said seems to have caught up with me. (7)

「書くというより読むこと」に重きを置く詩とは一体どのような詩なのだろうか。「その世界の内側に閉じ込められた幾多の秘密」とは具体的には何を指すのか。そしてまた詩の内容が奴隷詩人に「追い付く」とはどういうことなのだろうか。以上の疑問を出発点として、本稿では *FTC* 解釈の鍵を握る巻頭詩篇を「読むこと」に重点を置く。まず、詩篇を訳出した後で諸種の先行テキストを随時参照しながら「幾多の秘密」を解明する。また本篇プロットとの比較検討を試みつつ、“FTC”という〈開かれたテキスト〉を読み解いてゆきたい。Gates が指摘するように、現代アフリカ系アメリカ人小説家の中でも最も斬新な作家と目されるイシュメール・リードは、読者に「解説のために《必要な学識》を要求する」(29)。“FTC”は難解なテキストで、固定的な閉じた意味を提供するだけではない。詩人のみならず読者もまた「その世界の内側に閉じ込められた」意味を求めて積極的に読みの行為に参加しなければならない。

*

以下、全10節72行から成る“FTC”をスタンザ毎に翻訳し、下線を引いた詩句を中心に読み解いてみよう。

Dear Massa Swille:

What it was?

I have done my Liza Leap

& am safe in the arms

5 of Canada, so

Ain't no use your Slave

Catchers waitin on me

At Trailways

I won't be there

親愛なるスウィルのだんなさま——

どんな具合だったかですって？
 わたしはイライザよろしく流水を跳んで川を渡り
 今じゃ無事に
 カナダの懐に抱かれ、だから
 あなたの奴隷追っ手も役立たず
 トレイルウェイズのバス発着所で
 わたしを待ち伏せしても
 そんなところにぐずぐずしているわけがありません

[第1節] “Liza Leap”という譬喩表現には、1850年代の奴隷制廃止運動に啓蒙主義福音伝道の立場から影響を及ぼした Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom’s Cabin; or, Life among the Lowly* (1852年, 以下 *UTC*) への言及が見られる。*UTC* の中で4分の1混血女奴隷 Eliza Harris が幼子 Harry を抱えながらオハイオ川の流水群を跳んで渡る場面を、「命懸けの人間だけに神が与える力」(73) による「奇跡」(87) とストウは規定する。しかし「お転婆ハリエット」 (“Naughty Harriet”) と題される *FTC* の第1部の冒頭では、1849年の奴隷体スレイヴ・ナ験記 *The Life of Josiah Henson, Formerly a Slave, Now an Inhabitant of Canada, as Narrated by Himself*¹ を無断借用した上で敬虔な黒人キリスト教徒ヘンソンを種に *Uncle Tom* を造型したストウの剽窃行為が激しく糾弾されている (9)。詩人は奴隷制廃止運動の文脈にある譬喩言語を詩の中に盛り込むことによって、奴隷所有者スウィルの神経を逆撫でようとする。しかしながら、“safe in the arms of Canada” という詩句と共に、この箇所は本篇のプロットと齟齬をきたす。クイックスキルがカナダに渡る術は、南北戦争後の泥棒男爵ロバー・バロンの如き海賊ジャック所有の豪華ヨットであり、渡河するのはナイアガラ川である(145)。そしてカナダに渡るもその地はアメリカ資本に支配され (“Americans own Canada” 161)、逃亡奴隷の夢見る「平和を好む神の国」 (“the Peaceable Kingdom” 160) ではあり得ない。その上、南部再建時代の反動秘密結社 Ku Klux Klan を彷彿させる自警団 Western Guard から、逃亡奴隷は始終執拗な厭がらせを受ける。“FTC” の第7節49-50行目のように奴隷を拘束し虐待する刑具や戒具はないにしても、米国南部からカナダへの地理的移動によって黒人は〈奴隷制〉から逃れ自由を獲得することはできない。

「役立たず」と揶揄される “your Slave Catchers” とは、本篇では「あなた

を再度所有したいという注文を受けた」NEBRASKA TRACERS 株式会社のふたりの社員であり、潜伏中の奴隷詩人クイックスキルの前に突如姿を現す (61)。この場面で興味深いのは、詩の内容が“autobiographical”ではないと知った奴隷追跡者のひとり¹⁰が、“FTC”を次のように評する箇所である。

“. . . They have poetic abilities, just like us. They’re not literal-minded, as Mr. Jefferson said. I knew that he couldn’t have possibly managed all of those things. Sneak back to the plantation three or four times. Know about poisons. . . . That would have been too complicated for a slave.” (63)

Notes on the State of Virginia (1787年ロンドン版刊)の中でThomas Jeffersonは、奴隷制を「絶え間ない圧制」と「退廃的な服従」による「主従間商取引」と定義し、ヴァージニア州民に及ぼす道徳的悪影響を憂慮する(162-63)。しかしその一方で、奴隷は洞察力や深慮に欠けると指摘し、黒人種の詩的想像力までも否定している——“Among the blacks is misery enough, God knows, but no poetry. . . . Their love is ardent, but it kindles the senses only, not the imagination” (140)。“FTC”をジェファソンの黒人知能劣等説に対する反証として見なすネブラスカ・トレーサーズは、その譬喩言語を荒唐無稽な空想としか読み取れない。「詩は知ること」(“Poetry is knowing” 104)と明言する詩人も自作の詩に織り込まれた「秘密」を読み解かぬかぎり、奴隷制と自由の不確定性を理解し得ない(Monsma 86-87)。本篇の終盤でUncle Robinが一人ごちる、“Too much freedom makes you lazy. Nothing to fight. Well, I guess Canada, like freedom, is a state of mind” (178)という実理をクイックスキルが理解するのは、「昔の治療師が用いた手順を踏み、誰にも盗まれぬようにストーリーを自分のものにするやり方で、アンクル・ロビンの物語を執筆する」(11)のためにスウィル邸に帰還後のことである。すなわち、“FTC”という従順でないテキストは、ロビンというくアンクル・トム²のストーリーを意識的^{スレイヴ・ナラティブ}に取り込むことによって、多声性を帯びた奴隷体験記に転じるのである。

10 I flew in non-stop

Jumbo jet this A.M. Had

Champagne

Compliments of the Cap'n

- Who announced that a
 15 Runaway Negro was on the
 Plane. Passengers came up
 And shook my hand
 & within 10 min. I had
 Signed up for 3 anti-slavery
 20 Lectures. Remind me to get an
 Agent

わたしは飛び立ったのです、ノンストップ便の
 ジャンボジェット機で今日の午前のうちに。
 シャンパンをいただきました
 機長からの謹呈ですって
 機内放送もありました
 逃亡黒人が同乗していますと。
 乗客たちがやって来て
 わたしと握手をしてくれたのです
 10分もたたないうちに、わたしは
 3つの奴隷制反対講演会に出演する契約に
 署名したのです。代理人を雇うのを忘れぬよう
 注意のこと

[第2節] 前節8行目の“Trailways”（南部に強い長距離バス会社）同様に
 “jumbo jet”（ボーイング747型機）は時代錯誤である。しかし *FTC* では、小説
 の時代設定は1860年代としながらも、1960年代と呼応した道具立てが随所で施
 されている。例えば、主人アーサーに南部のスウィル邸こそが「おらがカナダ」
 と即答するロビンは、深夜テレビ番組の聴視者であるし（19）、第8節52行目
 のミズ（“Ms.”）や精神科医（“shrinks” 21）といった1960年代の語彙や社会風
 俗が挿入されている。1860年代と1960年代の共時性を端的に物語るのが、1865
 年4月ワシントン D.C. のフォード劇場からのテレビ中継の最中に暗殺される
 Abraham Lincoln の描写（103）であろう。飛び散った脳組織と何度も放映さ
 れるハイスピード画像は、1963年11月ダラスのケネディ大統領暗殺のフィルム
 映像と重なり合う。*FTC* の時代錯誤に関してリードは、西洋世界の直線的時

間の観念とは異質な、アフリカ伝来の共時感覚に基づくと発言している (Gover 13)。³このような時の廻流の中では詩人が自問するように、事実と虚構は不分明なものとなってしまう (“Who is to say what is fact and what is fiction?” 7)、歴史も奇妙で複雑な幻想の等価物に変じてしまう (“Strange, history. Complicated, too. It will always be a mystery, history. New disclosures are as bizarre as the most bizarre fantasy” 8)。

ニューヨーク州バッファロー市で開催された反奴隷制詩の朗読会は、「成功には程遠い」内容である (143)。リンカン大学の学生は手の平に拳を打ち付けながら「今少し情熱 (fire) を込めるべきだ」と催促するが、これに対しクイックスキルは、自分を「シアーズ・ローバック通販の安物暖炉」に譬えて自嘲する (144)。この挿話には、Sekora が「白い封筒に封印される黒いメッセージ」(502) と呼ぶ、白人主導の奴隷制廃止運動における初期アフリカ系アメリカ人作家の言論抑圧状況が軽妙な筆致で斉時的に描かれている。

Traveling in style

Beats craning your neck after

The North Star and hiding in

25 Bushes anytime, Massa

Besides, your Negro dogs

Of Hays & Allen stock can't

Fly

豪勢な旅をしていると

首を伸ばして

北極星をよく見ようとしたり、茂みに

いつも身を潜めたりする必要もないのです、だんなさま

その上、あなたの黒人用獵犬は

ヘイズ・アンド・アレンの家畜番犬ですが

空を飛ぶわけにもゆきませぬ

[第3節] “The North Star” は逃亡奴隷たちが北部やカナダを目指す際の道標であり、彼らの多くは人目に付く昼間は藪に身を隠し、この一際明るい恒星を頼りに北へ北へと夜道を急いだのである。

エリー湖上の蒸気船で遭遇した William Wells Brown にクイックスキルが、“... I read your novel *Clotel*. ... It [“FTC”] kind of imitates your style...” (121) と語る場面から、“FTC” は本格的な米国黒人長篇小説の嚆矢 *Clotel; or, the President's Daughter* (1853年ロンドン版刊, 以下 *Clotel*) を手本として詩作されたことが判明する。第3節で一例を挙げれば、“Negro dogs of Hays & Allen stock” は *Clotel* からの借用表現である。*Clotel* の第3章 “The Negro Chase” の中で引証された1845年11月の地方新聞広告に “Negro dogs (of the Hay and Allen stock)” (63) という字句がある。この黒人用猟犬の広告には黒人狩りへの一日貸出料3ドル、逃亡奴隷捕獲の場合15ドルの割増料金の記述も見られる。この借用記述は、一読しただけでは見落としてしまう “FTC” の インターテキストチャリティ 間テキスト性を物語る。つまり “FTC” は、先行する文学テキストと依存関係にあり、自己発生的に成り立つ孤立したテキストではあり得ない。

By now I s'pose that

30 Yellow Judas Cato done tole

You that I have snuck back to

The plantation 3 maybe 4 times

Since I left the first time

わたしが思うに今頃はもう

黄色い肌の裏切り者ケイトウがあなたに話していると

わたしがこっそり舞い戻ってきているってね

3回、ことによっちゃ4回も農園に

最初にそこをおさらばして以来

【第4節】“Yellow Judas Cato” は、「忠実なあまり志願して奴隷となり」(34) 「ハワード将軍の教化学校」(51, ハワード大学の前身) で博士号を取得する(53)。米国史上のモデルとして、1739年サウスカロライナ州で30余名の奴隷所有者や奴隷監督が殺害された奴隷叛乱の首謀者 Cato of Stono が連想される。しかしリードは盲目的な英雄奴隷崇拜に懐疑的で、⁴所謂白人化した黒人インテリとしてケイトウを戯画化する。逃亡奴隷の居場所を主人に密告する奴隷監督は、「カナダなんか見たことありません、だからそんなものありやしません」(52) と語る、詩的想像力に欠ける〈太鼓持ち〉である。

クイックスキルが農園に帰還するのは物語の最後であり、31-32行目のように幾度も舞い戻っている記述は本篇には見当たらない。しかし、大小取り混ぜ6,000点以上現存するといわれる奴隷体験記群の中には、農園に置き去りにした妻子を救出するため、北部への脱出成功後も敢えて危険を冒し南部に立ち戻る逃亡奴隷の記録も数多く残されている (Olney 46)。

Last visit I slept in

35 Your bed and sampled your

Cellar. Had your prime

Quadroon give me

She-Bear. Yes, yes

前回滞在した折にはあなたのベッドで
眠り、地下室貯蔵のワインを
味見させてもらいました。あなたのとびっきりの
4分の1混血女がわたしに
深い情けを交わしてくれました。さよう、さようでございます

[第5節] “FTC”の成功でホワイトハウスに招待されたクイックスキルは、慣れぬフランス料理で腹痛を起こし、大統領の寝台に臥せる。そして詩の中で「スウィルのベッドに横になったこと」(85)を思い起こすが、詩人が実際にその行為に及んだかは疑わしい。地下室のワインに関しては、「誰かがワインを全て飲み干した」という屋敷奴隷の注進を耳にするロビンが「にやりと笑う」(30)という外面寸描から推理すれば、犯人はロビンの可能性が大きい。ここに読み取れるのは、クイックスキルが詩作した“FTC”の中にロビンのストーリーが紛れ込んでいるということである。したがって、失語症のスウィルの遺言を改竄し屋敷を相続したロビン (robbin’の語呂合せ)の元へクイックスキルが帰還し、ロビンの奴隷体験記^{スレイヴ・ナラティブ}を執筆することで“FTC”は大幅に加筆修正され、FTCのテキストが完成することが暗示されているのである。

黒人奴隷を題材とする *UTC* や *Clotel* といった19世紀中葉の感傷小説では“Quadroon”は不可欠な構成要素であろう。“She-Bear”は、俗離れた黒人知識層を代表するケイトウには無論解説不可能な俗語表現である (52)。

You was away at a
 40 Slave auction at Ryan's Mart
In Charleston & so I knowed
 You wouldn't mind
 Did you have a nice trip, Massa?

あなたはあの時お留守でした
 チャールストンで開かれたライアン市場の
 奴隷競売においでで、だからわたしにゃ判ってた
 あなたはちっとも気になさらないだろうって
 楽しいご旅行でした、だんなさま？

【第6節】ライアン市場でスウィルが競り落とした奴隷は、Pompey という名前で「黒んぼ10人分の仕事をやってのける」(35)ほど有能な使用人として紹介されている。恐らくこの人物のモデルは、*Clotel* の第2章 “Going to the South” で奴隷商人の下で長らく働き、競売に掛けられる直前の中年奴隷に年齢を誤魔化すように唆す同名の黒人奴隷であろう (56-57)。一方 *FTC* の忠実な黒人奴隷ポンペイは、実は「堪能な腹話術師」でスウィル邸を横領したロビンの右腕ともいうべき秘書に変貌する (175)。

I borrowed your cotton money
 45 to pay for my ticket & to get
 Me started in this place called
 Saskatchewan Brrrrrr!
 It's cold up here but least
 Nobody is collaring hobbling gagging
 50 Handcuffing yoking chaining & thumbscrewing
 You like you is they hobby horse

あなたが綿花で儲けたお金を拝借して
 飛行機代の支払いに使いました、そして
 身を興すための当座の資金として、この土地で
 その名もサスカチュワン、ブルルルル！

こっちは寒さが身に凍みますが、何はさておき
 首輪を掛けたり、両脚を縛ったり、猿轡をかませたり
 手枷や頸木や鎖を使ったり、ネジで親指を締め付ける輩などおりません
 あなたみたい人はこの土地の人にとっちゃ揺り木馬に過ぎぬのです

The Mistress Ms. Lady
 Gived me the combination
 To your safe, don't blame
 55 The feeble old soul, Cap'n
 I told her you needed some
 More money to shop with &
 You sent me from Charleston
 To get it. Don't worry
 60 Your employees won't miss
 It & I accept it as a
Down payment on my back
Wages

ミセス・ミズの奥さまが
 わたしに錠前の組番号を教えてくださいました
 あなたの金庫を開けるために、咎めちゃなりません
 あの弱々しく老いた方を、おかしら
 わたしが奥さまに申し上げたんです
 だんなさまが買得品をあさるのにお金が入り用ですよって
 あなたがチャールストンからわたしを使いに行かれたと
 お金を受け取るために。ご心配にはおよびません
 あなたの使用人は金がないのに困りやしませんよ
 つまり、わたしはその金を
 わたしが貰うべき未払い賃金の頭金として
 受け取ったという次第

[第7-8節] 本篇には、クイックスキルがスウィルの「綿花マネー」を「未払い賃金の頭金として受け取る」記述はない。ただし、南北戦争終結のため軍資

金の借入れをスウィルに願い出たリンカンが、受け取ったはずの金貨の入った5つの袋のうちひとつを紛失するというエピソードがある(50)。着服した可能性が高い人物は、金貨を運ぶのを率先して手伝ったロビンである(37)。地下室のワインを飲み干す場面同様に“FTC”には、〈アンクル・トム〉の仮面を被るロビンの所業が詩人の知らぬ間に書き込まれているのである。

ところで、“FTC”の文学形式上のモデルとしてこれまで2通の^{オープン・レター}公開書簡が指摘されている(Wordell 77; Reilly 6)。1848年9月22日付の反奴隷制新聞 *Liberator* に寄稿されたダグラス書簡(1848年9月3日付)と Lydia Maria Child 編纂の *The Freedmen's Book* (1865年) に口述筆記で採録された Jourdon Anderson 書簡(1865年8月7日付)である。南北戦争を挟み込むように書かれたこれらの書簡は、“FTC”を読み解くための史料として重要であるので、その特質について幾分詳細に論じてみたい。前者はダグラスの最初の自伝 *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave, Written by Himself* (1845年) の中で、前主人との暮らしより「10倍も辛かった」とダグラスが回顧する、「卑劣で残酷な」(81) Thomas Auld に宛てた手紙である。ダグラスは、逃亡に至った理由を一点の曇りもないほど明晰に説明する。

We are distinct persons, and are each equally provided with faculties necessary to our individual existence. In leaving you, I took nothing but what belonged to me, and in no way lessened your means for obtaining an *honest* living. Your faculties remained yours, and mine became useful to their rightful owner. I therefore see no wrong in any part of the transaction. (339, 下線引用者)

「わたしの財産はその正当な所有者に役立つことになったのです」という言い回しは、奴隷の無償労働を唯一無二の基盤とする奴隷制経済の理不尽を批判すると同時に、“FTC”で言及される〈未払い賃金〉の請求を正当化する。

〈未払い賃金〉要求の道義的理由付けは、ジョージダン・アンダソン書簡に更に明瞭に認められる。何世代にも亘って黒人奴隷に無償労働を強要してきた元主人 P. H. Anderson が労賃詐取の罪を償わぬかぎり、最後の審判の日が確実に到来すると書き手は予見する(267)。この書簡では、元主人の誠実さを測ることを目的とした〈未払い賃金〉の請求が事細かに算出されている。

Mandy says she would be afraid to go back without some proof that you

were disposed to treat us justly and kindly; and we have concluded to test your sincerity by asking you to send us our wages for the time we served you. This will make us forget and forgive old scores, and rely on your justice and friendship in the future. (266, 下線引用者)

ジョーダンは自分の月給を25ドル、妻 Mandy の週給を2ドル、無償労働年数を各々32年と20年に設定する。そして総額11,680ドルの〈未払い賃金〉を算出する。さらに賃金不払い期間の金利を加算する一方で、支給された被服の実費及び往診3回と抜歯1回分の医療費を減算する。この微に入り細を穿つが如き計算方法には、実際に〈未払い賃金〉を手にすることよりも、ダグラス書簡同様に元奴隷と元主人の厳密な個別化の手續と、奴隷労働の強要という犯罪を立証しようとする姿勢が窺える。この正義が遂行されて初めて「昔日の恨みを精算し、今後のあなたの公明正大と友誼を当てにできる」と書き手は言い切る。なお最後の一文には、主人から銃をもぎ取って命を救ってくれた恩人への謝意が表され、元主人に対する辛辣な皮肉で書面は締め括られている。

“FTC” は同時に、*Clotel* の巻頭に置かれた “Narrative of the Life and Escape of William Wells Brown” (7-44) の中で引用される、ブラウンの元主人 Enoch Price による2通の信書への返答書簡とも解釈可能であろう。ブラウンの白人支持者宛に書かれた1848年1月10日付の書簡には、前年に出版された *Narrative of William Wells Brown, a Fugitive Slave, Written by Himself* を読んだプライスが「あの男 [ブラウン] が奴隷のままであることを私は望んではないのです」と嘘言を弄しながら、15年前に650ドルで購入したブラウンを半値で売却する意向が記されている (33)。一方4年後の1852年2月16日付の手紙では、1850年9月に連邦議会で可決した逃亡奴隷法による社会情勢の変化を盾に、売値を325ドルから500ドルに釣り上げている (43)。ブラウンがプライス書簡を掲げた意図は、“he [Brown] could not conscientiously purchase his liberty, because, by so doing, he would be putting money into the pocket of the manstealer which did not justly belong to him” (33-34, 下線引用者) という〈自由買取り〉拒絶に至る事由説明に明らかであろう。

奴隷制において動産 (chattle) として売買されてきた逃亡奴隷にとって、自由をもっと確実なものとする手立ては〈自分を買い戻す〉ことである。しかしそうして獲得した自由には、逆に奴隷制の経済原理を黒人自ら肯定してしまう

危険が伴う。FTCでは、「現金を支払って歴史から飛び出す」(“*cash your way out of history*” 10) ことを謀る逃亡奴隷リーチフィールドに、この論理矛盾が投影されている。1861年に出版された *Incidents in the Life of a Slave Girl, Written by Herself* の中で Harriet A. Jacobs は、〈自分を買戻す〉という長年の夢が実現する間際「自分を財産と見なしてしまうことに強い躊躇」を感じたと回想する (199)。してみると、ロビンの遺言改竄と遺産相続は、ジェイコブズが抱いた深憂を逆手に取った奇抜な着想と見なすことができるだろう⁵——
 “. . . Property joining forces with property. I left me his whole estate. I’m it, too. Me and it got more it” (171)。遺言執行後スウィル邸の50部屋は、クイックスキルの教示で南部全土から集まった鍛冶屋、教師、彫刻家、作家といった元黒人奴隷たちに開放される (11)。こうした民主的な財産共有と共同利用によって、ロビンの詐取行為に伴う自家撞着は解消されるのである。

I must close now

65 Massa, by the time you gets
 This letter old Sam will have
 Probably took you to the
Deep Six

そろそろ筆をおかねばなりますまい
 だんなさま、あなたがこの手紙を手にする頃には
 あのサムをやつがもう
 ことによるとあなたをお連れしているかもしれません
 お墓のところまで

[第9節] “old Sam” とは、*Clotel* に登場する同名の奴隷詩人を指すと考えられる。この人物は、教区牧師の主人 John Peck が詩作した “MY LITTLE NIG” という奴隷制支持の詩を主人の急逝を祝う狂詩に密かに〈書き換え〉たり (133-35)、父の遺志に逆らって農場奴隷の解放計画を遂行する病弱な娘 Georgiana の腹心となって活躍し (144)、最後には “Master Sam” と呼ばれるまでになる (146)。サムは、逃亡を企むこともなく奴隷制の価値体系を内面化し、忠誠を誓いながら叛逆心を抱き続ける、皮肉で不屈なトリックスターの黒人詩人として強烈な印象を与える。⁶ FTCにおいて *Clotel* のサムは、逃亡奴隷詩人クイッ

クスキルと、スウィルの遺言を〈書き換え〉て遺産相続するロビンに分割投影されていると解釈して間違いないであろう。

“Deep Six”は「6尋ひろ(約10.8メートル)の水深に沈める」という語源を持ち、元来は水葬を意味する俗語である。本篇では、14歳で夭折した妹 Vivian への近親相姦愛が、スウィルに因果応報をもたらす。終盤近くになって嫉妬に狂うヴィヴィアンの亡霊が登場し、“... You’ll never give up me, will you, brother? Out in my sepulcher by the sea. By the grey dismal seaaaaa” (135) と Edgar Allan Poe の “Annabel Lee” (1849) の詩句もじを振りながら兄に死後の婚姻を迫る。怨霊に恐れ戦いて後退するスウィルは、暖炉の火に「喰われて」しまう (137)。主人の埋葬に関して逃亡奴隷詩人は、ポウが思い描く幻想的な「海辺の墓」への土葬ではなく海葬を予見してみせる。だが結局のところ、詩人にとって不倶戴天の敵は、まるで公開火刑に処せられる晒し者のように生きたまま茶毘に付されるのである。

That was rat poison I left

70 in your Old Crow

Your boy

Quickskill

あれはわたしが入れて置いた殺鼠剤
あなたのオールドクロウの中に

あなたの下僕
クイックスキル

[第10節] リンカンと会見中のスウィルがオールドクロウに手を伸ばしたとき、南軍兵士の狙撃弾が酒瓶を粉々にする (30)。よって詩人が殺鼠剤をウイスキーに混入したのか不明のままである。なお米国奴隷制史家によれば、元奴隷の証言記録スレイヴ・ナラティブや奴隷体験記には、奴隷所有者や奴隷監督を密かに殺害する方法として毒殺や放火や故意の事故が確認できるという (Kolchin 159-60)。

“Your boy”という表現は、先に引用した2通オープン・レターの公開書簡と比較すると一見奇異な印象を受ける。その理由は、ダグラス書簡では “I am your fellow man, but not your slave” (342) と明記され、対等な立場と奴隷身分の明確な否定が

認められるし、アンダソン書簡では“From your old servant” (267) という過去と現在の身柄の相違が強調されているからである。Bergmann が指摘するように、手紙の末尾で「あなたの下僕」と自称するクイックスキルは、主人に復讐を誓いながらも「依然として感情的にはスウィルに支配されている怒れる詩人」なのであろうか (203)。アフリカ系アメリカ小説における怒りと語りの構造を分析する Hedin は、^{スレイヴ・ナラティブ} 奴隷体験記の語り手が漏らす憤懣が両刃の剣となる危険があったと説明する。すなわち憤怒に駆られた文章表現は、黒人自伝作家の人間性を確立すると同時に、激し易い黒人は拘禁すべきという奴隷解放警戒説の論拠を強めてしまうのである (38)。してみれば、「あなたの下僕」という恭謙卑遜の呼称には、表向き主人への忠誠を誓いながら本心では叛逆心を抱く黒人奴隷のトリックスター的特質が込められているのではないか。

第 1 節 1 行目の“Massa Swille”が「だんなさまの遺言 (Massa's will)」に読み換え可能なように、“Quickskill”という手紙の結語は、言葉を用いて敵を殺害 (kill) するための羽ペン (quill) を連想させる (Hoffman 386)。ロビンとクイックスキルの共通点は、必要とあらば陰に隠れて従順な黒人奴隷を演じ切ることにある。こうした虚実相半ばする行動規範こそが、奴隷解放後もく奴隷制を存置する米国社会にあってしたたかに生きる、アフリカ系アメリカ人に特有な面従腹背という父祖伝来の智慮なのである。

注

1 元ボストン市長で穏健な奴隷制廃止論者 Samuel A. Eliot が代作したヘンソン立志伝は、UTC のアンクル・トムは一体何者なのかという世俗の興味に翻弄され、その内容を質的に変更され続けた逃亡奴隷体験記の顕著な事例である (Winks 131)。

2 FTC の決定稿 (第 3-4 章及び第 5 章) に該当する草稿段階では、アンクル・ロビンは「アンクル・トム」の人物名で登場している (“From” 74; “Flight” 7)。

3 Jean Toomer の掌篇 “Carma” (*Liberator* 誌第 5 号 [1922 年 9 月] 掲載) の語り手は、“Time and space have no meaning in a canefield” (13) と述べ、神秘的なまでに美しい南部風景に溶け込む薄幸の黒人女性を描写しようとする際には、西洋合理主義は無効になってしまうと主張する。

4 スウィル邸を相続したロビンは、くアンクル・トムくとして忌み嫌われる自分と、1831 年 8 月ヴァージニア州で米国史上最大の奴隷叛乱を起こした Nat Turner を

同列に置き、皮肉を込めて問い掛ける——“*Now Nat's dead and gone for these many years, and here I am master of a dead man's house. Which one is the fool?*” (178)。

5 自分を〈財産〉と見なすロビンの狡智は、Toni Morrison の^{スレイヴ・ナラティブ}奴隷体験記小説 *Beloved* (1987年) の中で、飢餓に瀕し子豚を盗んで食べた行為が露見した際 Sixo が発する “Improving your property, sir” (190) という〈口答え〉にも読み取れる。

6 *Clotel* のサム of 解釈に関しては、拙稿「Black Sam から Master Sam へ——*Clotel* にみられる *Uncle Tom's Cabin* の書き換え」『アメリカ文学研究』36 (日本アメリカ文学会, 2000年2月発行予定) を参照。

参考文献

- Anderson, Jourdon. “Letter from a Freedman to His Old Master.” *The Freedmen's Book*. Ed. Lydia Maria Child. Boston: Ticknor and Fields, 1865. 265-67.
- Bergmann, Linda Shell. “Flight to Canada.” *Chicago Review* 28 (Fall 1976): 200-05.
- Brown, William Wells. *Clotel; or, The President's Daughter*. 1853. *Three Classic African-American Novels*. Ed. and introd. Henry Louis Gates, Jr. New York: Random, 1990. 3-223.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave, Written by Himself*. 1845. Ed. and introd. Benjamin Quarles. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- _____. “To Thomas Auld, September 3d, 1848.” *The Life and Writings of Frederick Douglass: Early Years, 1817-1849*. Ed. Philip S. Foner. 1950. New York: International, 1975. 336-43.
- Gates, Henry Louis, Jr. “Parody of Forms.” *Saturday Review* 5 (4 Mar. 1978): 28-29.
- Gover, Robert. “An Interview with Ishmael Reed.” *Black American Literature Forum* 12 (1978): 12-19.
- Hedin, Raymond. “The Structuring of Emotion in Black American Fiction.” *Novel* 16.1 (Fall 1982): 35-54.
- Hoffman, Donald L. “Pomorex: Arthurian Tradition in Berthelme's *The King*, Acker's *Don Quixote*, and Reed's *Flight to Canada*.” *Arthuriana* 4.4 (1994): 376-86.
- Hurston, Zora Neale. *Their Eyes Were Watching God*. 1937. Fwd. Sherley Anne Williams. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1978.

- Jacobs, Harriet A. *Incidents in the Life of a Slave Girl, Written by Herself*. 1861. Ed. and introd. Jean Fagan Yellin. Cambridge: Harvard UP, 1995.
- Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia*. 1787. Ed. and annot. William Peden. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1982.
- Kolchin, Peter. *American Slavery, 1619-1877*. New York: Hill and Wang, 1993.
- Monsma, Bradley John. "Active Readers . . . Obverse Tricksters": Trickster Texts and Cross-Cultural Reading." *Modern Language Studies* 26.4 (Fall 1996): 83-98.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. New York: Knopf, 1988.
- Olney, James. "I Was Born: Slave Narratives, Their Status as Autobiography and as Literature." *Callaloo* 7.1 (Winter 1984): 46-73.
- Reed, Ishmael. *Flight to Canada*. New York: Random, 1976.
- _____. "Flight to Canada." *Fiction* 3.2-3 (1975): 7-8.
- _____. "From Flight to Canada." *Iowa Review* 6.2 (Spring 1975): 74-82.
- Reilly, John M. "The Reconstruction of Genre as Entry into Conscious History." *Black American Literature Forum* 13.1 (Spring 1979): 3-6.
- Sekora, John. "Black Message/White Envelope: Genre, Authenticity, and Authority in the Antebellum Slave Narrative." *Callaloo* 10.3 (1987): 482-515.
- Smith, Billy G., and Richard Wojtowicz. *Blacks Who Stole Themselves: Advertisements for Runaways in the Pennsylvania Gazette, 1728-1790*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1989.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. Introd. Alfred Kazin. New York: Knopf, 1995.
- Toomer, Jean. *Cane*. 1923. Introd. Darwin T. Turner. New York: Liveright, 1975.
- Winks, Robin W. "The Making of a Fugitive Slave Narrative: Josiah Henson and Uncle Tom—A Case Study." *The Slave's Narrative*. Ed. Charles T. Davis and Henry Louis Gates, Jr. New York: Oxford UP, 1985. 112-46.
- Wordell, Charles B. "Ishmael Reed's *Flight to Canada*: Metafiction and Metahistory." 『文藝言語研究・文藝篇』12 (筑波大学, 1987年9月): 63-77.